東京「立石」の情緒(あじ)

現役の頃、東京へ出張して都庁などで資料収集することが多かった。そのあと東京の街並み、下町の商店街をよく歩いた。商店街を歩くと、街の風景とともに、そこで生活する人の姿が見えてくるようで興味深い。

強面オヤジが守る立石の情緒

ルール

かばんは抱えて入店する

既に飲んでいる人はお断り

のんべえの酒肴の代表

もつ焼き「宇ち多」

あの味を自宅でも

図書館で定期的に読んでいる東京新聞は、鋭い記事とともに、東京の風景、生活を特集していて興味深い。11 月 4 日「強面オヤジが守る立石の情緒(あじ)」に注目した。かなり前に立石を駆け足で訪ねたことがあり、懐かしさのあまりレポートで紹介したくなった。

レトロなアーケードが目を引く京成立石駅前の立石仲見世商店街。10 月中旬の平日、日が高いうちから行列ができていた。揚げ物や総菜のにおいが胃袋を刺激する。

多くの初心者が直面するのが、宇ち多 ‥ が客に求める独特なルールだ。「かばんは抱えて入店する」「既に飲んでいる人はお断り」。ネットに常連客が書き込んだ「入門編マニュアル」「9 つのおきて」なる記事がずらり。行列待ちの暇つぶしでそんな記事を読めば、店に入る前から緊張が高まる。

ぶっきらぼうに促され、いざ入店。オレンジ色の明かりの下で、みんな談笑することなく、黙々と料理に向かっている。「入門編」に書いてあった通りに、おとなしく絶品のもつ焼きを食す。撮影は自分の手元以外は NG。30 分ぐらい過ごしただろうか。外に出ると、奇妙な充実感に包まれた。このドキドキの正体はなんだろう。店を仕切る 3 代目の内田朋一郎さん(50)は仏頂面を緩めて意外な答えを口にした。「作り込みだよ、全部。普段からこんな怖い顔のやついねーよ」

「いい年したおじさんがさ、改札を出て『あいつも同じ車両に乗っていたな』と少し速足になる。等間隔で行列に並び、窮屈な空間で行儀よく食べて飲む。ようやく抑圧から解放されて外に出るとまだ明るい。『あー気持ちいい』って、ここまでが宇ち多 ‥ なんだ」

昭和の匂いをとどめる立石。しかし駅周辺では線路の高架化に合わせた再開発が計画されている。良くも悪くもゴチャゴチャした駅前を整理し、災害に強い街にしようというのだ。既に一部の飲食店が消えるなど「酒都」の景色は変わり始めている。立石で生まれ育った内田さんは、防災面で改善が必要だと理解しつつも、複雑な感情をにじませる。「いつかはやらなきゃいけないと思うけどさ、寂しいよね。五感で楽しむのが立石。揚げ物や総菜のにおいがなくなったらうちの魅力も減る。一つのピースも欠けちゃいけないんだ」

(2020 年 11 月 21 日)